

会社員からの一大決心 市特産品“キュウリ” 農家への転身

大学卒業後、会社員として物流会社に勤めていた竹内さん。現在はキュウリ農家として、ビニールハウスへ出向くのが日課です。

休日はなくても、
時間はつくりやすい

「一年中、ビニールハウスの中で作業をしています。40度を超える過酷な環境になることもあるんです」

竹内さんは日中の高温になる時間帯を避けるため、毎朝5時に起床し、6時に作業を開始。1・8月は「苗植え」、3～6月、9～12月は「収穫」を日役まで続けます。また、キュウリ栽培の間にはネギ栽培も。繁忙期以外は一人で作業しており、就農14年目を迎えた現在も、休日を取ったことはありません。「農業は地道な管理が大切なので、ハウスに行かない日はありません。でも、時間を自分でコントロールできるので、想像よりも自由かもしれません」

竹内さんのリフレッシュ方法は週に3日程度、市内のジムで汗を流すこと。会社員として働いていた頃とは全く異なる生活ですが、今ではすっかり体になじみ、キュウリの成長を楽しむ毎日を送っています。

移住の決め手は
就農へのサポート体制

就農先を求めて、関東圏内の情報を集めていた竹内さん。千葉県内にも候補地を見つけていきましたが、サポート体制の手厚さが決め手となりました。

「農地や出荷団体の紹介など、最も充実していました。相談しやすい窓口があったことも、後押しになりましたね」

当時は、埼玉県川口市在住でしたが、「はにゅう農業担い手育成塾」への入塾に伴い、羽生市への移住を決意。指導農家の下、農業経営のノウハウをより実践的に学びました。

1年間の修行を経て、竹内さんはキュウリ農家として独立。当時の出荷量は約15トンでしたが、現在は年間25トンを超える規模に成長しました。しかし、最近はその市の特産品でもあるキュウリ農家が減少傾向にあると危惧しています。「農業は苦勞もありますが、やりがいもあります。ぜひ多くの方に挑戦してほしい。誰でも大歓迎です」



1. ビニールハウス内に入ると、視界がグリーンで埋め尽くされます
2. 成長を見守ってきたキュウリを、一つひとつ丁寧に収穫します
3. 大量の収穫は、次回へのモチベーションにつながります

Profile

たけうち ひろゆき

竹内博之さん

埼玉県川口市から移住
(2013年)

博之さん(46歳)は大学卒業後、物流会社に就職するも「生涯続けられる仕事がしたい」と、2007年から埼玉県農林公社の研修プログラムに参加。5年間農業の経験を積んだ後、知識を深めたいと、2013年から市が開催する「はにゅう農業担い手育成塾」に参加。現在は独立し約1,000平方メートルのハウスで年間約25トンのキュウリを出荷している。